

メディア研究と「産学連携」

さんしゃ Zapping

Vol. 32 No. 3 (通巻 187号)

2017年12月

<産社学会 ニューズレター>

編集・発行:立命館大学産業社会学会(教員・院生委員会)

事務局:産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186 E-mail: s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp

http://www.ritsumei.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/

[目 次]

<学外研究報告> プレストンでのサバティカルを終えて:パブ、オリンピック、ヘビーメタル 市井 吉興 p. 2 <全国規模学会開催報告> 岡本 尚子 p.4 日本・中国数学教育国際会議開催について 第9回対人援助学会を立命館大学で開催 中村 正 p. 5 〈アドバンスドセミナ―報告〉 アドバンストセミナー「社会意識論のすすめ: 金澤 悠介 p.8 データの変化から社会をつかむ」で報告して 柏木 智子 p. 11 子どもの貧困に何ができる?~学校・地域におけるケア~ <専門研究員紹介> 立石 祥子 p. 12 自己紹介 <院生自己紹介> 「"栄養"と"食べること"の研究」 巽 美奈子 p. 13 **くエッセイ>**

飯田豊

p. 15

プレストンでのサバティカルを終えて: パブ、オリンピック、ヘビーメタル

市井 吉興

2016年9月から2017年9月まで、1年間のサバティカル (学内研究5ヶ月、国外研究7ヶ月)の機会を頂戴いたしました。ここでは、イギリス・プレストンでの国外研究についてお話しさせていただきます。

まず、私が家族とともに滞在したプレスト ンの紹介をさせていただきます。プレストン は、イギリス北部の地方都市でマンチェスタ ーより鉄道で約1時間のところに位置してい ます。プレストンは産業革命期より紡績業で 繁栄し、その名残を町の至る所で感じること が出来ました。また、プレストンはビートル ズの誕生の地であるリバプール、イギリス屈 指のリゾート都市であるブラックプールにも 容易にアクセスしやすいところです。なお、 私たちが住んでいたフレンチウッドというエ リアは、インド・パキスタン系の人々、ムス リムの人々が多く生活しており、イギリスの EU離脱をめぐる国民投票後の彼らとの日常的 なふれあいは、私たちにとって貴重な体験と なりました。

私は、「2020 東京オリンピック開催に向けたポリティクスの社会学的分析:2012 ロンドンオリンピックとの比較を通じて」という研究テーマを掲げ、プレストンにあるセントラルランカシャー大学(以下 Uclan と称します)を拠点に研究活動を行いました。Uclanでは、オリンピック、ワールドカップといったスポ

ーツメガイベントに関する世界的な研究者で あるジョン・ホーン教授に、大変お世話にな りました。ホーン教授は、2020年に開催され る東京オリンピックに対して非常に強い関心 を持っており、彼との研究交流は私の研究を 進めるうえで、大変、有意義なものとなりま した。その成果は、6月8日から10日にロン ドン大学ゴールドスミスカレッジで開催され たシンポジウム「London, Rio, Tokyo Olympics Symposium」の3日目のセッション に参加し、"Creative reconstruction" and 2020 Tokyo Olympic Game: Disaster Capitalism, Celebration Capitalism and Olympic legacy という発表にまとめました。 本発表は、2020年大会を2011年3月11日に 発生した東日本大震災後、オリンピック招致 の大義名分を「震災復興」と掲げた 2020 東京 オリンピックの招致活動を震災復興政策で用 いられた「創造的復興」という言葉に注目し、 2020 年大会の「オリンピックレガシー」に込 められた日本社会のビジョンを批判的に検討 したものです。このシンポジウムの2日目に は、2012年ロンドンオリンピックのメイン会 場周辺―オリンピックを機に再開発されたイ ーストエンド―を散策する企画に参加しまし た。ここに掲載した写真は、再開発に反対す る人々の活動の拠点となった建物です。散策 しながら、2020年の東京大会を機に、東京は



どのような姿になるのだろうかと思案しておりました。このシンポジウムは、私自身のオリンピック研究を進めていくうえで、多くのヒントを与えてくれました。

また、研究に関連しては、望外の出会いがありました。それは、The International Society for Metal Music Studies(ISMMS)の中心メンバーであるリーズベケット大学でスポーツ社会学、レジャー社会学のカール・スプラックレン(Karl Spracklen『ハーバーマスとモダニティーの終焉におけるレジャー』を始めとする様々な著作あり※写真右側)と私の研究拠点であるUclanで哲学、倫理学、ポピュラーカルチャーを教えているカント哲学研究者のナイル・スコット(Niall Scott ※写真左側)と交流が出来たことです。



それまでに私が知っていたヘビーメタル研究は、一言でいうと「ヘビメタ=マスキュリニティの表象とその再生産」というものでし

たが、そのような研究状況をはるかに超えているのが現状です。ポピュラーミュージックの市場拡大、グローバル化にともない、世界至る所にヘビーメタルバンドは存在しているが、その音楽やスタイルは単純に西欧化されたものではなく、伝統的なものや民族的なものをミックスしながら多様に存在しているとのことです。それゆえに、ヘビーメタルがクローバル化に対するアンチテーゼ、個別化を分断化に対抗する集合的アイデンティティの形成を担うという点に彼らが注目していることは、非常に興味深いと思いました。現在、彼らから「日本のヘビーメタルシーンの分析をせよ」との宿題を出されており、どのようにしようかと検討しております。

研究上の出会いのみならず、私はプレストンで様々な人々と出会うことが出来ました。 パブで日本人が独りでビールを呑んでいる姿がよっぽど珍しかったのか、声をかけられる 機会が多かったです。私もその機会を利用し



て、拙い英語ではありましたが、彼らとの語 らいを存分に楽しみました。

最後になりますが、サバティカルの機会を 与えていただいた学部の先生方、職員の方々 に厚く御礼申し上げます。

<全国規模学会開催報告>

日本・中国数学教育国際会議開催について

岡本 尚子

2017年10月29日(日),30日(月)の2日間 にわたり、立命館大学朱雀キャンパスにて日 本・中国数学教育国際会議を開催しました。 本会議は、38年間の交流実績をもつ日本と中 国の算数・数学教育の研究交流を目的とした 会議です。会議の源流は、1979年、横地清教 授(元・数学教育学会会長)が東北師範大学 や北京師範大学の教授らと協力し、開拓した 日本・中国数学教育研究交流に遡ります。両 国の研究交流は、"お互いに台所を見せ合 う"ことを精神に展開され、発展してきまし た。自国の算数・数学教育の現状, 課題や問 題点などを包み隠さずに伝え合い、解決に向 けた意見交換を行ったり, 互いの国の相違点 を明らかにしながら、長所を学んだりするこ とで、両国の算数数学教育の向上に努めてい ます。

今回,中国からは,曹一鳴教授(北京師範大学,全国数学教育研究会理事長),王光明教授(天津師範大学,全国数学教育研究会副理事長),代欽氏(内蒙古師範大学・全国数学教育研究会書記長)をはじめとして計8名の研究者が来日しました。1日目は5つの招待講演と13の一般発表,2日目は6つの一般発表が行われました。招待講演,一般発表とも,原則として,中国語から日本語へ,日本語から中国語への逐次通訳を介して行われました。初日の午前中に行われた招待講演では,曹一鳴教授によって「How Chinese Learn

Mathematics Outside School: A Cultural Review on Shadow Education in China」のテ ーマの発表が行われました。中国における受 験のための学習塾 (Shadow Education) の現 状や、その在り方についての話がなされまし た。これまで、中国においても学習塾はあっ たものの, 算数・数学教育学の研究テーマと して取り上げられることは少なく, 中国の状 況を知ることのできる貴重な機会となりまし た。また, 王光明教授による招待講演では, 「高中生数学素养的操作定义」のテーマで話 が行われました。経済協力開発機構が実施し ている国際的な学力調査である PISA (Programme for International Student Assessment) で問われる数学的リテラシーの 育成について, 中国の取り組みが説明されま した。数学的リテラシーは、世界的な学力基 準の一つになりつつあることから、どのよう な学びを進めているのかは、日本との比較の 側面においても重要な情報となりました。

すべての招待講演,一般発表ともに日本, 中国の参加者から質問や意見が多く出され, 活発な議論がなされました。自国の状況を伝 え,踏み込んだ質問もありながら,終始和や かな雰囲気での国際会議となりました。なお, 次年度は,中国の貴州師範大学において,中 国全国数学教育研究会 2018 年&国際学術年 会(International Conference of Chinese Association of Mathematics Education in 2018) との同時開催が予定されています。

最後になりましたが、今回の会議の開催にあたりまして、産業社会学会全国規模学会助成をいただきましたことに、心よりお礼申し上げます。また、お忙しい中、申請のご審査をいただきました先生方、様々な手続きでお世話になった共同研究室の職員のみなさまに感謝いたします。誠にありがとうございました。



王光明教授による講演

第9回対人援助学会を立命館大学で開催

中村 正

産業社会学会の全国規模の学会開催補助金を得て、第9回対人援助学会(11月4日-5日に敬学館を会場にして約100名の参加)を成功裡に開催することができた。小規模な学会なので補助金はたいへん助かる制度である。感謝の気持ちを込めて内容の報告をしておきたい。

対人援助学会は、これまで縦割りに組織されてきた社会福祉、心理臨床、教育実践、保健医療等の領域の知を超え、広く「人を助ける」という実践的行為として対象化し、その作業を当事者の決定を軸に過不足なく行うための方法として位置づけ、臨床実践レベルから交流するために組織した比較的新しい学会(2009年設立)である。要支援者を客体としてではなくひとり一人が個々の独立した人格として、その存在を社会的に認められるよう、個人的なミクロレベルの直接的援助のみならず、社会に向けてマクロレベルの組織や制度のあり方の改善をも提案する援護活動(アドボカシー)を重視している。目指すところは、様々な対人援助についてその実践的現場から

示される実証的事実から、あるいはこれまでの研究の歴史から「対人援助学Science for Human Services」という新しい学範を創り、その内容を絶えず更新することにある。

今回の大会の基調提案は「危機の時代に抗する対人援助のフロンティア」と題して梁陽日さん(本学会常任理事/同志社大学講師)にお願いした。2016年度の神奈川大会(第8回大会)は「相模原障害者殺傷事件」直後の大会だったこともあり、急遽、参加者全員が発言できるようにしたラウンドテーブル風の企画をもった。ひきつづき「人間らしく生きること」が根本的に問われている事件としてさらに議論を継続させ、対人援助学研究と対人援助実践に携わる私たちがその課題にどう向き合い、期待に応えていくのかを問う機会にしたいと考えた。

この課題は、その事件だけではなく多様な 様相からなる複合的な事件である。経済格差 と社会的排除による社会的困難の常態化、在 日外国人・障がい者をはじめとするマイノリ ティへのバッシング、ヘイトスピーチの氾濫、 東アジア情勢の危機に乗じた国家主義の強化、 生きにくさを心の問題、個人の資質、病理性 に還元していく傾向等があり、対人援助の諸 実践にもかかわる現状認識が必要だと考えた テーマである。再度、私たちの暮らしや人権 を脅かす状況として現代社会の動向を把握す べきだと位置づけた。

ひきつづき、それを受けて、「地域と対人 援助」に焦点をあて、身近な事柄から「わた したちにできること」を再確認することとし た。地域は生きる<場>である。そこに臨み、 佇み、赴き、創るという営為をとおして人間 らしく生きることの協働の営みに根ざしてこ そ対人援助はその本領を発揮する。地域にお ける対人援助の現在を照らし出し、必要なら 概念も再考・創出しつつ、場にひらかれてい く、場とともにある支援や臨床の実践を多様 に確認した。

教育講演は「フロンティアはローカルだー 地域と対人援助」という視点から立命館大学 地域健康社会学研究センター教授の早川岳人 さん(公衆衛生学)にお願いした。健康を単 に病気という視点からではなく、生活習慣や 生活環境、「社会」という大きな視点からみ たとき、どんな姿が浮かび上がるのだろうか。 現代社会において、健康課題は、単に個人の 生活習慣の改善だけでは予防・対処はできな い。個々人が属している地域社会の健康問題 (健康格差問題) の改善も同時に行っていく ことが重要となる。早川さんはこれまで行政 に蓄積されながらも利活用の限られてきた医 療・健康データを活用し、当事者に話を聴き、 質的研究、量的研究の双方を混合して地域の 特性を見出し、地域政策の一環として位置づ けた健康課題を研究している。「自分たちの 体は自分たちで守る」、「自分たちの地域は 自分たちで守る」、自主、自立、自衛、共生 という意識のもとで地域づくりを行っていく 必要があると指摘した。

この考え方の源流をつくったのは京都西陣に拠点をおく病院で地域医療を実践してきた京のわらじ医者、早川一光さんだ。その早川一光さんを招いてお話をいただく時間も設けることができた。早川一光さんは京都府立医科大学卒業、京都西陣で白峯診療所、のちの堀川病院で住民参加の地域医療を実践し、患者・家族や地域に耳を傾け、現在は、自らも患者になりながら人間が生きる場に根ざした「生活医療」の必要性について問いかけた。

続いて地域事例報告を二つ組織した。ひと つは、新潟における退院支援研究会を主宰さ れている本間毅さん(新潟医療協同組合木戸 病院、整形外科・リハビリテーション科医師) の報告である。退院後も日常のケアや医療管 理を入院中と同じように受けられるよう、患 者と家族が適切なプランを作成することを支 援する部門を越えたプロセスとされる退院支 援が、患者さんやご家族に「退院強制」と言 われかねない状況にあるのではないかと危惧 して患者とその家族本位の退院支援となるよ うにこの会を組織した経過について話をした。 これは、社会保障費の適正利用と医療機関の 経営健全化の狭間で、医療の質が、在院日数 や在宅復帰率など数字で見えるアウトカムか ら評価される現状が生んだ矛盾であるが、強 制ではなく支援にする過程にこそ地域の対人 援助が成り立つと指摘した。超高齢社会を支 えるため病院から在宅へのシフトを狙った地 域包括ケアシステムや、病床数と在院日数の 適正化を目標とする地域医療構想だが、2017 年の春から始まった退院支援にかかる診療報

酬算定がこの傾向に拍車をかけているとした ら真に残念なことだと内省を重ね、それでは どうすべきかについての対案を中核的病院か ら地域に広がる多職種連携のなかですすめて いる。

二つ目の地域事例報告は、地域猫のとりく みをとおして対人援助学の姿がみえてくると いう意外な報告だった。小池英梨子さん(「人 もねこも一緒に支援プロジェクト」代表)に 来ていただいた。しばらく「公益財団法人ど うぶつ基金」でもお仕事をされていた。小池 さんは、"多頭飼育崩壊"と"貧困"、"動 物虐待"と"児童虐待""ノラ猫の過剰繁殖" と"繋がりが失われた地域"等の視点から、 猫が絡む臨床事例に協力している。ゴミ屋敷 問題は実はネコ屋敷ともいわれることもあり、 セルフネグレクト事案には動物問題が存在し ている。どのケースも"人"の問題と密接に 関わっているという。動物問題は人が作り出 した問題であるがゆえに、動物問題の近くに は必ず人の問題が存在する。"猫問題"改善 に向け、介入する中で、お手上げ状態だった "人の問題"が改善に向けて動き出す支援の 事例を報告してくれた。猫を通して、人や地 域、社会のシステムが動く、それは、システ ム論やコミュニティ心理学の視点から捉えれ ば納得できることでもある。「切り離しによ る原因特定と取り除き」ではなく、「包括的 にとらえ、ちいさなシステムチェンジを行う」 猫から目線で動いた支援について、ケース検 討をとおして、システム論やコミュニティ心 理学の知見をベースとした考え方について話 をしてくださった。対人援助学にとっては意 外な発見があった。

さらに、猫との共生の視点を補強するため に太田康介さん(フォトジャーナリスト)に

も来てもらった。被害地である福島で動物問 題を凝視する写真をとりつづけている。「20 キロ圏地域」という視点で話をしてもらった。 福島第一原発20キロ圏地域で助けを待ち続け る動物たちの姿をとおして、メルトダウン後 の20キロ圏地域をとらえている。この地域は 「フクシマ」として世界の関心事となってい る。20キロ圏地域で人びとが住めない地域と なったところで助けを待ち続ける動物たちは どうなったのか。東北の寒い冬、食べ物のな くなった土地で命をつなぐ犬や猫。生き残っ た牛たちが迎えた悲しい結末。報道されるこ とのない原発20キロ圏地域の生態としての現 実を伝え続け、「のこされた動物たち」「待 ちつづける動物たち」の観点から迫っている。 伝えられることのない生き物の記録である。 無人の家で飼い主を待ち続ける犬、最後の力 を振り絞って助けを求める猫…。強く生きる 姿も、助けられなかった命も、動物たちの現 ありのままに伝える。写真は赤裸々だ。太田 さんは自らの写真集に「私にできることは、 写真を撮り、今起こっている現実を多くの人 に知ってもらうこと。それしかできないので す。やがて怒りが沸いてきて、チクショー、 チクショーと呻きながらシャッターを切りま した。」とも。その怒りは、私を含めた人間 に対してのものですと語る。ボスニア・ヘル ツェゴビナやアフガニスタン、カンボジア、 北朝鮮などを撮る戦場カメラマンとしても活 躍してきた異色の経歴が対人援助学と出会っ た。チェルノブイリの森もそうだったが動物 たちは独自の生態系をつくって帰還困難地域 のなかを生きている。ここに小池さんの地域 猫のとりくみが関係し、地域の再生を図ろう としている。

こうして対人援助学会は伝統的な学知の区

分をこえ、生き延びるための智恵を出しあう 現場からの知の創出の場として機能している。 多分野共同を旨とする産業社会学会の理念を とも関係する内容だった。立命館大学大会に 相応しいと思っている。記して感謝したい。

<アドバンスドセミナー報告>

アドバンストセミナー「社会意識論のすすめ:

データの変化から社会をつかむ」で報告して

金澤 悠介

7月 15 日のお昼休み (12:10~13:00) に「社会意識論のすすめ:データの変化から社会をつかむ」というタイトルでアドバンストセミナーを行いました。ここでは、アドバンストセミナーで行った報告の内容について簡単に説明するとともに、その感想についても述べたいと思います。

報告の内容ですが、大規模な社会調査データの分析を通じて、2000 年代以降の人々の社会イメージの変化を検討する、というものでした。より具体的にいえば、「社会階層と移動全国調査」(通称 SSM 調査)という 10 年ごとに行われている日本国民を対象とした大規模な社会調査データを使用して、2005 年と2015 年で日本人の不公平感の変化を検討するというのが報告の内容でした。ただ、これだけの記述だと、多くの読者の方が「そもそも不公平感って何?」とか「なんで2005 年と2015 年を比較するの?」とかがすごく気になると思いますので、ここらへんについてもう少し詳しく解説します。

すごく単純化していえば、不公平感とは「理想の社会像」と「現実の社会像」のズレについての評価です。「理想」と「現実」のズレが

大きい人は不公平感が高く、ズレが小さい人 は不公平感が小さいと考えます。ただ、日本 社会全体について回答者にその不公平感を尋 ねると回答が非常に漠然としたものになるこ とがわかっているので、多くの社会調査では 「性別」・「学歴」・「働きかた」といった具体 的な領域での不公平感を測定します。たとえ ば、性別についての不公平であれば、回答者 に「あなたは今の日本社会には性別による不 公平があると思いますか」と尋ね、「1. 大い にある」「2. ある」「3. あまりない」「4. な い」という4つの選択肢の中で自身の判断に 最も近いものを選んでもらいます。そして、 さまざまな領域の不公平感を時点間で比較す ることで、どの領域で「理想」と「現実」の ズレが大きくなった(小さくなった)という ことがわかります。これは「理想」と「現実」 のズレという観点からみた人々の社会イメー ジの変化を検討するということになります。

次に、「なんで 2005 年と 2015 年を比較するの?」ということですが、一番の理由は使用する SSM 調査では 2005 年と 2015 年のデータしかないからです。それをいうと元も子もないので、より積極的な理由をいうと、

2005年に比べ、2015年は労働市場がより流動化し、正規雇用と非正規雇用の処遇格差も大きくなっていますし、「日本社会=格差社会」というイメージも人々の間で広く普及するようになっています。2005年に比べ、2015年は働きかたという水準でも主観的なイメージの水準でも格差が大きくなっているため、この2時点間での人々の不公平感の変化を検討することで、格差拡大という社会の変化が人々の社会イメージにどのような影響をあたえるのかを検討することができます。

前置きが長くなりましたが、2000年代以降 の人々の不公平感の変化は次のようにまとめ ることができます。

まず、過去 10 年間で、人々の不公平感の水準が上昇しています。2005 年調査と 2015 年調査では、性別・世代・学歴・人種・働きかたという5つの領域の不公平感を測定していますが、2005 年では、これら5つの領域で不公平が「1. 大いにある」あるいは「2. ある」を選んだ人の割合はそれぞれ6~7割程度だったのですが、2015 年になるとその割合はすべての領域で8割を超えるようになります。さらにいえば、2015 年において、回答者の半数は5つの領域すべてで不公平があると答えています。過去 10 年間の格差拡大によって、多くの日本人が日本社会を不公平なものと捉えるようになったのです。

次に、どのような人が不公平を感じるようになったのでしょうか。2005年と比較して、2015年では非正規雇用として働く人や無職の人が不公平感をもちやすくなっています。労働市場の流動化と処遇格差の拡大により、その当事者である非正規雇用者が不公平感をもちやすくなっています。また、ここでの無

職は求職中の人を除いているので、職場などで不公平な扱いをうける当事者ではないのですが、このような人たちは「日本社会=格差社会」というイメージの影響をうけて不公平感を持つようになったのかもしれません。

このような大規模な社会調査データの分析によって、格差が拡大することで人々の社会イメージが大きく変化することが経験的にわかりました。人々の社会イメージという「目にみえないもの」の変化を、大規模な社会調査データの分析を通じて、「目にみえるもの」にするのが社会意識論の面白さなのです。

というような感じの報告をアドバンストセミナーで行いました。広報期間が短かったこと(アドバンストセミナーをお引き受けしたのが7月上旬)や社会意識論というマイナーな分野がトピックだったりしたので、参加者は2-3人ていどだろうと予想していたのですが、教員も含めて10人くらいの参加者がおり、予想外の結果でした。参加者の方からいただいた感想の中には「なぜ人々の不公平感が過去10年間で上昇したのか、その理由をきちんと考えろ」という趣旨の手厳しくもありがたいものもありました。

最後に、短い準備期間にもかかわらず、アドバンストセミナーの開催のためにいろいろとご尽力いただいた小泉先生と浪田先生、そして、当日の会場の準備などで大変お世話になった産社事務室の皆さまと産社学会の皆さまに、深い感謝の気持ちを示して、筆をおきたいと思います。本当にありがとうございました。

子どもの貧困に何ができる?~学校・地域におけるケア~

柏木 智子

10月19日12:15~12:45に子どもの貧困に 関するアドバンストセミナーを行いました。 セミナーでは、子どもの貧困の実態と問題を 改善するための学校や地域におけるケアにつ いてお話しいたしました。

現在、子どもの7人に1人が貧困状態にあると言われています。これは、厚生労働省の「国民生活基礎調査」を用いて計算した相対的貧困率から割り出された数値です。それによると、日本では、特に、一人親世帯の貧困率が高い傾向にあります。子どもの貧困が、大きな社会問題となっているのは、それが子どもの不利と関連するからです。

日本では、貧困世帯の子どもと低学力・低 学歴との関連や貧困状態が子どもの身体に与 えるネガティブな影響が明らかになっていま す。また、貧困と子どもの問題行動との関連 も指摘され、攻撃性や多動、不注意などの外 在化した問題行動と、抑うつ、不安、引きこ もりなどの内在化した問題行動の両方に低所 得の影響が見られます。貧困の心理的影響と して、子どもの自尊感情・自己肯定感の低さ や学校における疎外感(居心地が悪く、のけ 者にされていると感じる)に作用するという ものがあります。それだけではなく、「意欲 の格差」やその源泉である興味の差、「希望 格差」さえも生み出すという指摘は、非常に 衝撃的なものとして受け止められてきました。 より深刻な見えにくい不利として、貧困と虐 待(ネグレクト)との間に強い関連が見られ るゆえの、子どもの発達上の課題発生もあり ます。

子どもの貧困が大きな問題となるのは、これらの不利が幾重にも重なって、重複する不利として子どもに現れるからです。そして、重複する不利を抱えた子どものなかには、無力化が進み、生きるためのすべも生きる意味も見いだせなくなる場合があります。もちろん、貧困世帯のすべての子どもたちが、こうした不利を被っているわけではありません。重要なのは、貧困世帯の子どものなかに、不利や困難を抱える子どもの割合が多いということです。

経済的貧困から不利に至るまでの経路は、複雑多岐にわたります。子どもの貧困問題とは、経済的困窮に保護者の様々な困難要因が加わり、それらが社会的支援によって改善されることなく蓄積された結果、不利や困難が重複して子どもに現れるその状態を指すと考えられます。

このような子どもの貧困問題を改善するために、ケアする学校づくりとケアする地域づくりについて考えてみます。ケアする学校づくりは、子どもが学習に参加できる環境を整える状態を意味します。たとえば、ノートや教科書、リコーダー等のモノが揃わないことによって、授業に参加できない状況が生まれます。そのため、授業における必需品は、誰もが借りられるような仕組みを作ります。教員に便利な場所に貸し出し場所を作り、子どもがあるいは代わりの教員が貸し借りをできるようにするのです。また、林間学校で使用する大きなカバンやパジャマなど行事で必要

になるものは、校舎のどこか一角にストック しておく場所を作ったりします。

次に、忘れ物をしてこない、宿題をしてくるといった習慣やルールにおける文化的剥奪を防ぐためには、教員が子どもの背景をしっかりと理解し、寄り添う指導が重要です。自宅に机がなくて、集中できる場所がなくて、などさまざまな理由で宿題をできない状況が生まれています。それに対して、「持ってこなかった」と怒るのではなく、「持ってこられなかった、してこなかった、してこられなかった」とラベリングの張り替えをするのが先決です。教員にとって「困った子」ではなく、「困っている子」「SOSを発している子」として理解するのです。

授業では、総合的な学習の時間を中心とした教科横断的なカリキュラムを開発し、子どもが自身に正当な権利があると認識し、ウェルビーイングを追究できる力や声を身に付けられるようにすることが必要です。そのためにも、承認され、尊重・敬意(リスペクト)される存在であると子どもが実感できるよう、学校内外の人々と協働し、包括的にアプローチする実践が重要となります。

ケアする地域づくりにおいて、現在取り組まれているのが主に子ども食堂と学習支援活動です。そうした活動の中には、栄養バランスのとれた食事や基礎学力の保障に加えて、公正な包摂型社会づくりへの萌芽が見られます。学校という公的な場や私的領域としての家庭で声を出せない子どもたちにとって、そこでは話を聞いてもらえる、そこでは自分の思いを話せるサードスペースとしての居場所となりつつあります。しかしながら、それら

の多くは保護者や地域住民のボランティアに よって運営されているものが多く、安心でき る居場所としての課題も散見され、今後、そ れらをどう発展させていくのかが検討されな ければなりません。

子どもの貧困に関心のある学生さんが集まってくださり、いろいろな質問をいただきました。しっかりと答えられなかったものもあり、私ももっと勉強をしていかなければいけないなと感じた次第です。その中で、どの本を読めばいいですか?という質問がありました。下記に、少し文献を提示しておきます。どれも、一般書として読みやすくなっています。どうぞ手に取ってご覧いただければと思います。

最後に、アドバンストセミナー開催にあた り準備いただきました先生方・事務室の皆さ ま、立ち止まって聞いてくださった先生方に 心より感謝申し上げます。ありがとうござい ました。

阿部彩『子どもの貧困』『子どもの貧困Ⅱ』 岩波新書、2008、2014年。

湯浅誠『「なんとかする」子どもの貧国』角 川新書、2017年。

柏木智子・仲田康一『子どもの貧困・不利・ 困難を越える学校』学事出版、2017年。

自己紹介

衣笠総合研究機構 専門研究員

たていし しょうこ 立石 祥子

みなさま、はじめまして! 4月から専門研究員としてお世話になっている立石祥子です。この度、自己紹介のページをいただくことになりました。産業社会学部には、素晴らしい先生や院生の皆さま、職員の皆さまがいらっしゃると伺っています。新しい出会いに、期待で胸をいっぱいにしています。この場をお借りして、ご挨拶をしたいと思います。

私の専門は、メディア研究とドイツ語圏地域研究という二つの領域が中心となっています。というのも、私は学部の頃、ゲルマニスティック(ドイツ学)を学んでいました。アーベーツェーも分からない状態から、私の研究者への一歩がいつのまにか始まっていました。その際、主専攻がメディア論、副専攻が政治学だったこともあり、大学院からはドイツ研究者も所属している大学院のメディア論の講座に進学しました。学部まではドイツ研究の範囲の中でメディア論をやっていたのですが、大学院からはメディア論の範囲の中でドイツを事例にするようになったのです。

大学院で専攻を変えたことで、当然ながら 研究環境は大きく変わったのですが、その後 の院生生活でも、私が師事した先生方が他大 学に転出していく事態が起き、指導教員が 次々変わっていきました。そのおかげで、こ れまで、ドイツ地域研究だけでなく、オルタ ナティブメディア論、デザイン論、言説分析 の先生の研究室で学生時代を送りました。研 究室を移り変わり、ドイツへの留学期間をは さみながらも、博士論文が4年で完成したの は、出身研究室の先生方が、それぞれの分野 からのコメントを出してくださり、最終的な 審査の段では転出先の大学から審査員として 加わって最後まで見守ってくださったおかげ です。

さて、これまで、ベルリン・オリンピック からパブリック・ビューイングまで、日独の 現代史における映像メディアの介在するイベ ントを主な研究対象としてきました。こう書 くと、スポーツの研究をしているの?とよく 聞かれるのですが、実はそういうわけではあ りません。こうした巨大なイベントの面白さ は、それがスポーツというコンテンツや、ス ポーツファンのための出来事に留まらないと ころです。ドイツのパブリック・ビューイン グの現場には、レプリカユニフォームを着て やってきて、画面もろくに観ずにスクリーン に向かって国旗を振り、その場では「ドイツ 代表最高~!」と言いつつも、後になってよ くよく話を聞いてみると、試合内容はほとん ど覚えていないしサッカーのルールもよく知 らない、という人が珍しくありません。この ようなマス・イベントは、なんの道徳的目的 ももたない一時的な集まりという点から、「続 かないものには意味がない」とばかりに軽視 されがちですが、その社会的役割とは何かに ついて考えてきた、というのが私のこれまで

の研究です。

ところで、現代史とは、ドイツ語で「Zeitgeschichte (ツァイトゲシヒテ)」と言い、現在生きている人が経験した歴史を扱うというはっきりとした定義があります。ですから、ドイツ史で言えば、ナチ時代のベルリン・オリンピックも、2006年のワールドカップドイツ大会も、現代史というわけです。「ゲシヒテ」は、歴史という意味だけでなく、「むかしむかし・・」ではじまるような「物語」という意味もありますから、ある出来事をめぐって、今生きている人が経験した物語を、研究してきたとも言えます。

現在生きている人の経験した出来事を研究 する上で、私は日独の若者を対象に、インタ ビューという調査手法を用いてきました。イ ンタビューという方法は、学生時代、私にと って、魅力的な道具であると同時に、研究者 としての未熟さがダイレクトに出てしまう恐 ろしい調査手法でもありました。ページ数が 限られた論文の中で、インタビューの概要や その中身、分析と得られた結論を書き連ねて いくと、個々の人びとの語りの強さとは別に、 結論に至るまでの分析がブラックボックス化 してしまいがちです。そこを納得させるよう なインタビュー調査を用いた研究は、結局の ところ、長年の経験とセンスがある一握りの 研究者であればこそ可能なものだと思ってい ました。しかも、私は日本とドイツをフィー

ルドにしているため、日本人と同内容のインタビューをドイツ語でもおこなって、それぞれ分析しなければなりません。ドイツと日本の若者たちの語りの分析過程をどうすれば分かりやすく提示できるのかも、悩みどころでした。

そこで、私はこれまで様々な研究室で学んできたことを総動員し、マス・イベントに参加した人の個人的な経験について、インタビューの内容を書き出した文字を追うコード化と同時に、図示というビジュアル・デザインの手法を使って分析するやり方を編み出しました。博士論文の研究対象としたのは、狭義にはメディア・イベントと呼ばれる分野の事例研究でしたが、経験もセンスもない自分がやれるインタビューの方法を考え、実行することが、博士論文の裏テーマとなりました。

今年の秋には、博士論文の表テーマであるメディア・イベント論について、受入教員の飯田豊先生と共編著書『現代メディア・イベント論』を発表しました。ドイツのパブリック・ビューイングの事例を紹介するだけでなく、博士論文で触れた理論編の一部も盛り込むことができてほっとしています。今後も研究に精進してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします。

<院生自己紹介>

「"栄養"と"食べること"の研究」

社会学研究科博士後期課程1回生

たつみ み な こ **巽 美奈子** この春より、入学いたしました異美奈子と申します。福間先生の研究室に所属しております。福間先生とご対面させていただいたのは、昨年の戦争社会学研究会での懇親会会場でした。博士課程から新たに籍をおかせていただくには、自分の知る先生からご紹介を受けてのち、研究室にご訪問させていただくという流れが通例ではないかと思われます。しかし私の場合は、ビールを片手に(今思えば恐縮極まりないです・・・)、優しい先生に思い切ってお声をかけさせていただいたことが、入学のきっかけとなりました。

私は現在も、大阪府下の公立中学校で栄養教諭という職に就く管理栄養士です。もともと料理をするのが好きで、食べることにも関心があります。今の研究をしようと思ったのには、この仕事を通じて子どもたちと関わっていく間に生まれた文化的な食への興味関心と、栄養学の実践的な問題に直面した体験が背面にあります。「食」というと、かなり幅広いですが、そのなかでもやはり気になるのは「食べる」というひとの行為です。

「食べること」というのは本来、それぞれの場で、何らかの影響を受けたことで変容することもあれば、一方で普遍的な側面も持ちそなえています。そのような観点をふまえつつ、私はいったい何によって、人びとは「食」を決定するのか?という問いを設定しました。そしてそれを解く方法として、過去の人々がいかにしてそれに影響するものを受容し、またそのときどう感じてきたのかという面から、明らかにしていきたいと考えています。

またこれまでの研究では、史料をもちいて 「食べること」と、それを規定しようとする 「栄養」のつながりの部分に注目してきまし た。修士では、大正期に誕生した「栄養学」 と、その実践的受容について考察しました。 またそれ以前には、海軍の兵食の研究にも取り組みました。海軍は、早くから栄養学的な 知見を食事に導入した集団給食のはじまりと いえるからです。

また、学術的な研究から少し離れますが、 食文化論的な取り組みも行いました。博士前 期課程の大学院に入学して間もないころに、 京都市の「東九条マダン」という多文化多民 族のまつり団体に参加するようになり、2年前 にはマダン実行委員会企画として「豆もやし ~作る・食べる・供える~」をテーマにパネ ル展示を担当させていただきました。このと きには、在日の方々への聞き取り調査を行い、 もやし工場見学にも出向き、「なぜ豆もやし が今も在日コリアンの人びとに親しまれるの か」を検討しました。

このように私は、さまざまな「食」の場面 に立って、人びとの「食」を決定づける社会 について、研究していきたいと考えます。

福間先生のもとで研究をしたいと考えたのは、社会学的な視点を基点におきつつも、歴史を非常に丁寧に扱われる先生のご研究に感銘をうけたからにほかありません。そして今後も、先生を見ならって、丁寧に史料と向き合い、常に研究に意欲的でありつづけたいと思っています!

現在取り組んでいる研究では、「栄養」観がいかにして近代社会の中に浸透していったのか、そしてその諸相の中にある「階層」や「学歴」といった、格差に関与しうる概念との関係性を検討しています。またこの研究の方向には、科学的な側面を持つ「栄養」と、「食べること」、「格差」とのつながり(構図)を明らかにすることが課題としてあります。・・・しかしまだまだ遠く長い道のりで

す。勉強しなければならないことも山積みで す。是非、研究会や勉強会にお声をかけてく だされば幸いです。何卒よろしくお願い申し 上げます。

<エッセイ>

メディア研究と「産学連携」

飯田 豊

2012年に産業社会学部に着任して以来、メ ディアに関係する社会連携科目を多く担当し てきました。2012年度から14年度は「NHK講座」 のコーディネータを務め、近年は訪問教員の 先生方の特別講義をお手伝いしています。た とえば、2016年度は是枝裕和先生、反畑誠一 先生(+亀田誠治先生)、川端義明先生、2017 年度は三枝照夫先生、そして再び反畑先生(+ 亀田先生)の特別講義などに、いずれもコー ディネータとして関わってきました。いずれ の講義も充実感が強い反面、負担も決して小 さくないので、ご助力いただける先生を随時 募集中なのですが、メディア研究者の端くれ としては内心、「おいしい」状況だと思って います。デジタル技術の発達にともない、映 画研究、テレビ研究、インターネット研究と いった区別が次第に失効している現在、さま ざまな現場の実践知に触れることが、メディ ア研究をアップデートしていくために何より も大切なことだと考えているからです。

もとをたどれば、マス・コミュニケーション研究という学問領域は1930年代のアメリカで、ラジオ業界と大学との産学連携を通じて輪郭をなし、それが戦後の国際的発展につながっていきました。具体的にいえば、30年代以降、ラジオ聴取に関する社会心理学的な研究が盛んにおこなわれ、とくにプリンストン

大学のポール・ラザースフェルドを中心とする「ラジオ・プロジェクト」が成果をあげていきました。オーストリア生まれのラザースフェルドは、ウィーン大学で統計調査にもとづく社会心理学に取り組んでいましたが、ナチスが政権をとったあとに渡米。彼らが取り組んだ調査は1935年、CBSラジオの経営者から巨額の研究資金とともに依頼され、産業として急成長するラジオの広告効果を、アンケートによる数量的分析にもとづいて明らかにするものでした。

また、オーソン・ウェルズが制作したCBS のラジオドラマ『宇宙戦争』を聴いた人びと の多くが、それを現実の出来事であると錯覚 し、全米各地でパニックが生じたとされるの が1938年のこと。この現象を詳細に分析し、 1940年に『火星からの侵入』を刊行したハド レー・キャントリルも、ラジオ・プロジェク トの一員でした。現在から振り返ると、これ はフェイクニュース (研究) の古典といえる でしょう。ちなみに2015年には、『ブロード キャスト・ヒステリア ―オーソン・ウェルズ の『宇宙戦争』とフェイクニュースの芸術 (Broadcast Hysteria: Orson Welles's War of the Worlds and the Art of Fake News) (ブラッド・シュワルツ著) という本が出版 され、フェイクニュースに対する現代的関心

にもとづいて、当時の状況が再検証されています。

それに対して、1970年代以降のイギリスに おけるテレビ研究も、産学連携的な相互交流 のなかから発生しています。レイモンド・ウ ィリアムズは60年代を通じて、BBCのドキュメ ンタリー番組の制作に携わったり、テレビド ラマの脚本を執筆したり、数々の討論番組に 出演したりすることで、テレビとの関係を強 めていましたが、1968年から72年にかけて、 BBCが出版する週刊誌『リスナー』にテレビ時 評を執筆しました。そして72年に渡米したの を機に、イギリスとアメリカにおける放送シ ステムと社会との関係を比較分析し、74年に 『テレビジョン 一技術と文化形式 (Television: Technology and Cultural Form) 』を刊行しています。そしてスチュア ート・ホールも長年、放送を通じて高等教育 をおこなうOpen Universityに勤務し、ラジオ やテレビ、ビデオなどの新しいメディアを駆 使して、その思想や実践を広めていきました。

かつては日本でも、大学と放送業界とのあいだで研究交流が盛んにおこなわれていましたが、近年はその余力が小さくなっているように感じています。1990年代、松本サリン事件やVチップ論争などを経て、「メディアリテラシー」が双方の新しい共通言語になりました。しかし現在、放送の現場と関わりながら若い研究者が育っていく土壌が、ずいぶん痩せ細ってきたように思います。国立大学の法人化以降、新聞社や放送局による寄附講座や連携講義は全国的に増加しましたが、現場の知識や技能を学生に分かりやすく伝えるだけにとどまり、学術的な相互交流には到達していないものも多く見受けられます。

これは以前、日本民間放送連盟の機関紙『民

間放送』で提案したことなのですが、現行の 寄附講座や連携講義はもっと活きたものにで きると考えています。たとえば、一方向的な 大規模授業にとどまるのではなく、新聞社や 放送局にとっては若年層に対するアクション リサーチの場、あるいは社員自身の再教育(=アクティブ・ラーニング)の機会として、大 学の若手研究者にとっては送り手研究の足が かりの場として捉え直すことができれば、双 方にとって意義が増すように思っています。

以上のような問題意識を抱えながら、2016 年度に「テレビメディアの新展開」という企 画研究を立ち上げ、実験的な授業をささやか に運営しています。定員15名のゼミ形式。ジャーナリズムを中心に扱う社会連携科目は学 部のなかに配置されているので、この授業で は営業的視点を重視し、とくに多様化する放 送外事業の展開に注目してきました。放送現 場の中核で活躍する講師陣との対話を通じて、 相互理解を深めるとともに、研究交流の可能 性についても検討するようにしています。2 年間の取り組みの到達点と今後の課題につい ては、また別の機会にご報告できればと思い ます。

Zapping 原稿募集

研究会・学会報告の他、留学記、課外活動報告など あらゆるジャンルのご投稿をお待ちしております。 また、いろんな特集も組んでいきたいと思っています。何本かまとめてのご投稿も大歓迎ですので、ご 提案がありましたら事務局に申し出てください。形 式はタイトル・名前・本文をつけ、1,500字~2,000字程度でお書きください。

原稿は<u>s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp</u>に送付してください。